

# 誰も知らない雄アリの世界

ほとんどの英語が話せなかったのに、アメリカでも研究の仕事を得た。「何でもこなせる」ことより、「その人でなければできない」ことが評価されたからだ。学生時代はあんなに苦手だった英語も、決して楽ではなかったが、好きな研究のためなら不思議と嫌ではなかった。

アメリカで研究していた時、うわさを耳にした。日本の沖縄に、OISTという国際的な研究機関がある、と。これまでの経験を生かして、自分も何かの役に立てるかも？ そんな思いで帰国を決めた。むしろ今は沖縄の人たちに助けられて、日々研究を進めている。沖縄の自然の変化をとらえて未来へ生かす、「OKEON美ら森プロジェクト」。目標は壮大だ。これまでの経験を総動員して、これから挑戦し続けたい。

# 未来へ

いっしょ

その半面、この無謀とも思える挑戦ができたことに、今は感謝している。世界で誰もやらなかったテーマへの挑戦。これが結果的には、中学校教員だった僕に、研究者への道を拓いてくれた。

吉村 正志 (OKEON「美ら森プロジェクト」コーディネーター)



長年放置されてきた存在だ。研究を始めたはいいが、案の定、答えが見えない問題山積。最初の10年はまさに手探り状態だった。

これからの季節、夜の買い物が楽しみだ。スーパーやコンビニエンスストアの窓の明かりには、たくさんのお虫が集まる。目を凝らせば、小さな虫たちの中に、お目当てのものを見つけられる。雄アリだ。普段は翅がない昆虫の代表格であるアリ。でも、次世代をより遠くへと送り出すために、巣分かれの時期には翅のある「羽アリ」を生産する。いわゆる「アリらしい」雌に比べ、雄の風貌はまるでハチ。この雄アリ研究が僕の専門分野だ。

一般的な「アリ」とはあまりに違うその風貌ゆえに、雄アリには分からないことが多い。種類を見分けるのすら難しく、アリ研究の世界では